舞踊における普遍的なるものと特殊的なるものの方向

神　沢　和　夫

1978年7月，大阪千里の万博跡地に近い読売文化ホールで，三日間のシンポジウムを行った。印度，朝鮮，沖縄の舞踊家の参加による。その他ヨーロッパ，カナダでの公演。印度，韓国への調査行の経験を資料とする一のフィールドワークである。

芸術に国境なしという。感性の普遍を前提とする。小説は翻訳できないが絵なら大丈夫という。それでは舞踊などは国境を気にしなくてよい芸術だということになろう。

ドストエフスキイやボードレエルが日本人に読まれ，尊敬されるのは，これとは逆の機制による。理性の普遍が前提となる。いずれにせよ，国家，民族を超え，異なる文化をもつ人々に通ずるものを作りたいという，普遍への願望は自然である。

普遍に高い価値を与えたのはヨーロッパの，自己本位で差別的な，価値体系内部でのことで，現在は，むしろ，特殊なるものを特殊なるままに価値づけようとする時代へと推移しつつある。しかも，かかる価値の変動への対応は，前衛と後衛の間の開きが大きく，個体の内部でも落差が並存するのが常である。この点を舞踊について確かめておこうというわけである。

現象として見る限り，舞踊に普遍はない。演奏芸術の一回性においてそうであり，肉体もしくは身体運動を媒体とする点においてそうであり，様式の可変性においてそうである。(はじめの二つの条件の解釈を略す)

様式を一言にしていえば，数多の個人的表現から共通部分を抽出して標準としたものである。従って，様式は，個別の中に重なり合う部分を見出しはするが，決してすべてをおおうことのないものである。常に個人的表現の個別かつ特殊を含んで現象する。この活発に運動している部分は，やがて新らしい様式の主要素に成長する。しかし，特殊が，このようにして新らしい普遍へ昇化してゆくという考え方とは別に，ついに特殊のまま，つかのまの光芒を残して消えてゆくものを，いまだ論理だてられないままに主張する立場がある。

それが実際家としての舞踊家の立場であり，彼らはみな，自己の特殊に殉じているのである。

異端が奪権して正統となる他に，特殊を貫徹した果に普遍の地平が開けるという図式がある。数の力学と価値の力学であり，デイメンジョンはちがうが，同じ価値の系譜にたつ。最近の舞踊家ないし舞踊評論家は，この創造行為に本質的にともなうはたらきにも故意に目をつぶっている。あるいは彼らの主観に即すれば乗り超えている。しかし彼らの主観がどうあれ，集団のレベルと個のレベルに妥当する二つの図式を支持する社会が厳存する以上，あいかわらず異端は正統になりつづけざるをえない。たとえば，かって異端であり，現在でも思い出したように裁判ざたとなることで，異端としての権威を回復して裸体の公開も，すでに初発の感動を失い，無限にパタアン化しつつある。そうなることで毒性を失い，やがて体制化し風化するのである。

ここに，自己の特殊に殉ずる実際家というのは，そのような価値評定の範囲外で，個々の創造者が知りつくしてきた特殊のことである。

個の行為である創作と，集団レベルでとり扱われる古典の概念について検討を加えることでこの問題に展望を開こう。

創作に二つの場合がある。公認の美的体系の上で一歩をふみ出すのと，既成に反対して，一切の遺産に背く場合とである。主観的には困難の度は同じである。客観的には拠りどころの有無，ないし確かさが問題となりうる。ここで，絶対あるいは束縛であった古典的規範が，大幅に値下げになったことが注意される。

現在の印度古典舞踊は，ゆがめられ，退廃しつつ師承によって伝承されたものを，千数百年以前の寺院，彫像と，サンスクリットで書かれた経典の解読をつき合せて復古したもので，発祥地マドラスでは百四十年以上はさかのぼれぬといっている。会友桧瑛司氏は四国民踊について百七十年を上限するといわれる。ここで古典神話の一環が崩れる。

テンポの決定は1930年以降に属する。日本の能，狂言のテンポは現在も刻々に変化しているし，アクセントも変ってきている。アクセントやテンポは構造に比して末節であるといいきれる根拠はまだない。

朝鮮で古典というと、宮中舞踊をさすか，これを雅楽と呼び,対して国楽と呼ぶ妓生の舞踊をさすか明らかでない。日本支配の間に，ことばとふりのかかわりが日本風になり，ふりは朝鮮風だが，当て振りともつかず様式的ともいえぬ新舞踊がひろがっている。印度では厳格な当て振り，日本の地唄舞ではできるだけことばから離れて心を踊ろうとする。その点では沖縄では明らかに日本である。では朝鮮はどうだったのか。今後の研究にまつしかない。その地唄舞の振りも，つけかたは同じ呼吸でも個々の振りは日々工夫で変ってゆく。新作がそのまま古典というわけになる。

印度の舞踊家にとっては，フォークダンスよりは制約の強いものが古典だと考えているが，神との一体感の中で生れたバリエーションは創作と呼びうるとも考えている。しかも時間概念がわれわれとはちがっていて，千年前の先人と，自分の工夫とを並列してともに創作だという。彼らの時は可逆的なのだ。そういうものを創作と呼びたくない。バリエーションだといいかえたがるのは日本人の理屈である。

古典も創作もこのように異種文化の間で相対化されてみると，普遍ということができない相談だとわかってくる。普遍とは，一時代，一社会において高い評価をうけ，時代を超え民族を超えて享受される場合にいわれてよい。いま，民族は超えられず，時代を超えるというのもそれほどの射程では語れないとなると，個々の創作者に残された途は，もう一度自己の特殊に沈潜することしかないのではないか。世界が狭くなり，統合が進むといっても，そこから新らしい普遍がひらけてくるという展望は余りない。他との比較は自己の特殊を際立って認識させることになる。

世界は一つという発展史観と進化論をすてる時期ではないか。

舞踊家は，もしそうする余裕があるなら，ルーツをさがし，比較学的検討，相互乗入れで創作を協働する，などの仕事をしたらよい。ただし，うわべだけの合同公演，運動の外観だけの類似点さがしならば，エネルギーの浪費である。